
ヴァンパイアの血族 -マイアール皇国記外伝-

オリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァンパイアの血族　ーマイアール皇国記外伝ー

【Nコード】

N3161B

【作者名】

オリオン

【あらすじ】

愛する姫は友の婚約者。それでも守る！大臣の陰謀で始まった事件は、若き騎士に過酷な運命に導いた。ハイスピードで進むホラーファンタジー登場！《著書「マイアール皇国記・魔人復活編」は、全国の書店から注文することができます》

前編（前書き）

この作品は、オリオンの著書「マイアール皇国記」の舞台で同著の登場人物が活躍しますが、全く別のお話としてお読み下さい。

前編

カイルとスカロン

河の中に造った町。

それが、首都マイアールを表すのにピッタリの言葉だった。国王、エンプレア三世が治めるマイア王国の首都マイアールは、北方の山岳地帯から流れる三本の川に囲まれた水の都だった。

三本の川は、町の中央を流れるルビコン川。西方を流れるユースコン川。東方を流れるコンスコン川に分かれている。

その三本が町をあみだくじのように走っていた。

三本のメインの川は、あみだくじの縦軸。そして、そこから引いた人工の運河は、横軸を形作っていた。運河の名前は、主にその番地名から取っていた。

そして、その事件が起きたのは、ルビコン川とタルーク運河が交差する辺りだった。

水路を、ゆっくりとゴンドラが進む。そのゴンドラには、二人の若者が乗っていた。

「スカロン、何処へ行く気なんだい？」

二人の内の一人が、相棒に尋ねる。

彼は、背の高いがっしりとした男だった。髪は黒く、瞳も黒い。凜としたオリエンタルな深みを感じさせる雰囲気をしている。

一方、行き先を尋ねられたスカロンは、その質問に答えようとはしなかった。ただ、春のポカポカ陽気の船縁ふなべりで、ポーツとしていた。その様子は、日なたぼっこをする猫みたいだ。

そんなスカロンの態度に腹を立てたカイルは、水面を軽く叩いた。春とはいえ、水はまだ冷たい。スカロンは、びっくりして彼を見る。

「なんだよ、君もせっかちな奴だな！　カイル！」

カイルは、肩をすくめて答えた。

「行く先や目的が判らないのは嫌いなんだよ」

「だからって人の顔に水をかけるやつがあるか？　少し口に入ったぞ！」

スカロンは、眉をひそめた。

カイルは、繊細で真面目な顔立ちなのに対して、スカロンは豪快で大胆な顔をしていた。口が大きく、顎が発達している。顔の半分以上が顎といったバランスだ。そして、目が小さくて鼻がでかい。カイルとは別の意味で見えていて飽きない。

「ぼくの顔は大きいんだから、水しぶきの当たる量も多いんだ。被害規模を考えて行動してくれたまえ」

スカロンは、冗談とも本気ともとれる調子でカイルに話しかけた。もちろん、カイルは真に受けていない。

「これは、これはスカロン殿下、失礼の事、ひらにご容赦を」

カイルも、冗談とも本気とも取れる調子で言い返した。

「よし、カイル卿。今日のところは許してあげよう」

スカロンは、もったいつけて返事をした。

二人は、顔を見合わせて笑い出した。

ただ、ゴンドラの船頭だけは、（何がおかしいんだか？）といった冷ややかな表情をしていた。

「冗談抜きに何処へ向かっているんだい？　君は行き先を教えてくださいな、ゴンドラに乗っても（あっちへ漕げ）としか言っていないじゃないか？」

スカロンは、船縁を背も垂れにしてリラックスすると、カイルの方をじっと見る。

「君がさ、行き先を知ったら同行するのを断るんじゃないかと思つてさ……」

今度のスカロンの発言は、冗談で済まされる物ではなかった。

「聞き捨てならないな！　君とぼくとの間でそんな遠慮をするなん

て……君とは兄弟のつもりでいたのに……」

カイルは、顔を曇らせた。それを見て、スカロンは笑う。

「冗談だよ。からかっただけさ」

「それにしても心外だな！」

カイルは、まだ納得できずにいた。

スカロンは、そんなカイルに構わずに、話を続けた。

「行き先はあそこだよ！」

スカロンの指差す先には、赤っぽい石壁の大きな建物があつた。三階層に分かれたそれには、高い尖塔がそびえていた。その塔の上で、何かがキラリと光った。

「遠眼鏡で見張りが覗いてやがるぜ！」

スカロンが、ゴンドラの上で立ち上がって言う。

「ここは、マルタ騎士団の小城だろ！」

カイルは、驚いて叫んだ。

「その通り、これからマルタ騎士団へ二人で殴り込みをかける」

「何故?! 理由は？」

カイルの問いに、スカロンは答えた。

「三日前、マルタ騎士団の連中が、路上で近衛騎士団を襲いやがった。近衛騎士団を預かっている俺としては、黙ってられる訳はなかろう？」

スカロンは、近衛騎士団の隊長をしていた。だから、部下の仇討ちは頷ける。しかし、カイルはどちらとも無関係だ。

「スカロン、近衛にもマルタにも、ぼくは義理だてする理由はないぜ？」

スカロンは、澄まして答えた。

「だけど、カイルは俺の友達だろ？」

「……」

どうやら、黙って付いていくしかないようだ。

スカロンは、軽やかにゴンドラから船着き場に飛び移る。カイルも

それに続いた。

目の前には城の大扉が、二人に立ちはだかるように堂々としている。

「中の連中は臨戦態勢だぜ」

スカロンは、まるで大きな悪戯をやらかす前の小僧みtainな笑顔を
見せていた。

「君って男は、人にスリルを味あわせるのが好きだね」

カイルは、緊張した面持ちだった。

「こんな事なら、鉄の鎧を着てくるんだった」

スカロンは、カイルの姿を見て答えた。

「ここまで来たら戻ってる訳にもいかないだろ。それで充分だよ」
そう言うスカロンは、白金に輝くプレートメイルを付けている。

鎧の下には鎖帷子と重装備だ。

それに対してカイルは、厚手の皮鎧だけだった。

カイルは、スカロンに何か言い返そうとしていた。しかし、その
前に相棒は大扉に蹴りを入れていた。

木材が碎け散る音と共に、分厚い扉は勢いよく開いた。

「スカロン、今度から何かする時は、掛け声くらいはかけろよ」

カイルは、この言葉と共に剣を抜き放った。城内にいた騎士が、い
きなり襲いかかって来たのだ。

カキン

白刃がぶつかり合い、火花が散る！

「何か、戦う事に納得がいかない……」

カイルは、疑問をいだきつつも、敵の体を突き飛ばした。

マルタ騎士のトレードマークは赤だ。赤い鎧に赤い胄^{かぶと}。それが、
広間いっぱいに広がっている。まるで、赤いピーマンを並べてある
かのようだった。

スカロンは、その大きな体に似合わないほどの跳躍力を見せ、赤
ピーマンの中に踊り込んだ。

背中に背負った大剣を、引き抜きざまに振り回す。巨大な剣が生

み出す遠心力は、赤い胃を跳ね上げた。五つの首が宙に舞い、胃よりなお赤い鮮血が、横殴りの雨のようにスカロンを直撃した。スカロンの鎧は、マルタ騎士の物と同じ色になった。

「一階は任せたぞ！」

スカロンはカイルに向かってそう叫ぶと、自分は二階へ通じる階段へ突進した。修羅と化した彼は、邪魔になる者を片っ端から粉碎する。

一階を任されたカイルは、スカロンのような強引な剣の使い方はしない。

スカロンは相手をねじ伏せて倒すが、カイルは、自然の流れで剣を動かす。華麗なステップで敵を捌いていく所は、まるで名人の舞いを見るようだ。常に四五人に囲まれながら、手足を傷つけては降参させる。

一方、二階に上がったスカロンは、盾を持った敵に行く手を阻まれた。そこは、狭い通路なので、左右に回り込む事ができない。スカロンは、盾の上から踵で蹴りを入れた。そのままガンガン押しまくる。恐ろしい事に、彼の蹴りでマルタ騎士が持つ盾は変形していった。そして、盾から不用意に体の一部が出ようものなら、すぐさま凶暴な剣が襲いかかって来る。

こうして、胃を潰された死体が次々に出来上がる。

スカロンのこの行為は、部下の仇にしては遣りすぎだと思える。確かに、マルタ騎士団と近衛騎士団とは犬猿の仲だ。だが、スカロンがここまでやるのは、別の理由があった。

カイルは、二階の廊下を歩いていた。一階は既に制圧していたので、スカロンを追って上がって来たのだ。

「まるで、竜巻が通った後みたいだな……」

それは、カイルの正直な感想だった。スカロンと言う名の竜巻は、小規模ながらも多大な被害の爪痕を残していた。変形した赤い鎧が、中身入りで散らばっている。

「戦争でもないのに、ここまでやっていいのか？」

カイルは、恐る恐る進んでいた。そして、二階の突き当たりの大きな部屋に、ひとり佇む竜巻を見つけた。

「スカロン、どうかしたのか？」

カイルは、部屋の中にいたスカロンに近付いた。

部屋の中は、“どうしたらこんなに散らかせるのか？”と疑問に思うくらいに散乱していた。机や椅子はゴミ同然だし、五六人のマルタ騎士が壊れた玩具みたいに落ちていた。

「これじゃ、内乱だよ」

カイルが笑いかける。しかし、スカロンは、表情を固くしたままだ。

「遅かった。遅かったんだよ、カイル！」

スカロンが叫んだ。カイルは、慌てて聞き返す。

「何が？ どうしたんだ？ スカロン」

「クロテニアから来る俺の花嫁を、マルタ騎士の連中が盗賊に化けて襲っているんだ！」

カイルは、それを聞いて啞然とした。クロテニアと言えば、思い当たる人がいる。

「エルシーク姫か？！」

「ああ、そうだ。俺は、マルタ騎士の連中が行動を起こす前に叩こうと思っていたんだ。ひとあし遅かった」

スカロンは、足元に転がっているマルタ騎士を指差す。そいつは、スカロンに手加減なしに殴られたらしく、顔が変形していた。

「こいつにぜんぶ吐かせたんだ。襲撃部隊は既に出発していて、キルム街道を南へ向かっている！」

言葉にしくなくても、二人の行動は決まっていた。カイルとスカロンは、マルタ騎士団の城を大急ぎで後にした。

襲撃

その襲撃は、明らかに待ち伏せされていた。

しかも、攻撃して来た連中は、どこかの正規軍らしい。

野盗を装うために紋章や鎧などは着けていないが、服の下には全員が高価なチェーンメイルを着込んでいる。武器も、そこらの野良犬が使うような安物ではない。

「ぎゃあああゝ」

護衛の騎士がまた一人、犠牲になった。襲撃側は既に歩兵隊を突破し、騎士団と衝突していた。そして、騎士団の後ろには、立派な四輪馬車が控えている。

「いよいよ、俺達の出番だぜ！」

この台詞と共に馬車の前に出たのは、体格のいい若者だった。黒髪に黒い瞳の彼は、手ぶらな上に軽装だ。たしかに強そうではあるのだが、武器を持った相手にかなうのだろうか？

早速、数人の襲撃者が彼に殺到した。

「うおおゝ」

若者は、大声を上げて気合いを入れると、地面をぶっ叩く。すると、ちょうど襲撃者の真下から、地面を突き破って無数の氷柱が突き出した。

その氷柱は、先が尖っていて、襲撃者五人を串刺しにした。

若者の名はコーディー。氷の魔法使いだ。地中の水分を魔法力で槍状にし、地面から突き出させたのだ。

「おら、どうした！ こっちから行くぞ！」

コーディーは、襲撃者の群れに飛び込んだ。

襲撃者が、長槍を突き出す。コーディーは、それを右手の手斧で受け流した。そして、襲撃者の懷に飛び込むと、左手のナイフで斬りつける。襲撃者は、首から血を噴き出して倒れた。

すると今度は、その噴き出した血が刃物となって、他の襲撃者に襲いかかる。

敵にとっては手が付けられない状態になった。

血を刃物に変えたのも、左右に現れた武器も、コーディーの魔法力

によるものだ。水分を武器に変えて使うのが、彼の魔法能力だ。

さて、コーディーには、他に二人の仲間がいた。彼らも、コーディーと同じ魔法使いだ。

その内の一人は、とても弱そうだった。背が低く、女の子みたいな顔立ちの男の子だ。アクアブルーの瞳に金色の髪。武器を持つより花の方が似合いそうだ。

そんな彼にも、襲撃者は容赦しない。徒党を組んで向かって来た。「くっつけ！」

その子は、地面をちょこんと叩いた。すると、いくつもの丸い光が、地表を高速で移動する。そして、襲撃者がその光に触れると、急に体の自由が利かなくなった。

男の子は、スキップするような軽やかな調子で、襲撃者の間を飛び回る。彼が通った後には、死体の森ができていた。みんな、立ったまま動けずに死んでいるのだ。

男の子の名はクリス。彼の魔法力は、相手の動きを止める事だ。間接的なら行動だけを止めるが、直接に触れた場合は心臓などの体の機能自体を止めてしまう。

彼ら三人組みの内の最後の一人は、なかなか姿を現さなかった。出現したのは、いきなり敵の後ろだ。何の前触れもなく、空間に刀身が現れた。

それは、空間を縦に裂いた。すると、そこにポツカリと穴が空き、丸顔の男が顔を覗かせる。彼が丸いのは、顔だけではなかった。体全体が丸いのだ。愛敬のある姿のその男は、弾むように飛び出すと、襲撃者に後ろから襲いかかった。人が良さそうな顔をしているのにやり方がズルイ。

彼の武器は、反りのある片刃刀だ。これで三人の敵を殛殺した。し

かも、服とチェーンメールは斬っていない。それらを通り抜けて、肉体だけを斬ったのだ。

彼の名はタックス。その魔法力は、現空間を切り開いて、異空間に入る事。異空間を通して、まったく別の場所に移動できる。この魔法は、魔法力の消耗が激しいので、普段のタックスは、それを補うために寝ている事が多い。また、彼の剣は、持ち主の思った所に攻撃することができる。そのため、服やチェーンメールを斬らないで肉体を斬る事ができた。

この三人の出現で、状況は一変した。襲撃者は浮き足だち、尻尾を巻いて逃げていく。

「ちっ、齒ごたえのない奴等！ 準備運動にもならねえーよ！」

コーディーが舌打ちする。

「そう？ 僕は楽しめたけど？」

そんな感想を述べたクリスだが、欠伸がでている。

タックスはと言うと、もう眠そうだ。

「おい！ 立ったまま寝るな！」

コーディーは、タックスを担ぎ上げると、二つ折のまま馬の背に乗せた。

その時には、タックスは熟睡中だった。この気絶したかのように寝てしまう所は、才能と呼べる域にまで達している。

コーディーは、タックスを処理した後、四輪馬車に近づいた。クルミ材の上等な扉を軽くノックする。

「お姫さん、悪い奴は追っ払ったぜ！」

馬車の窓にはカーテンが引かれていたが、それが開いた。

そこには、若い女性がいた。エメラルド色に輝く大きな瞳が、コーディーの方を見ている。

「何だよ！ あんまり見つめるなよ！」

コーディーが、照れ笑いをした。

若い女性は、ちょっと俯いた。その白い陶器のような肌が、少しだけ赤らむ。

「感謝の言葉が見つからなくて……」

彼女が、恥ずかしそうに口ごもる。その姿が、とても可愛らしかった。

「馬鹿だなあー、感謝の言葉より金だよ。その方が腹の足しになるね」

憎まれ口をたたくコーディーだったが、照れ隠しであることは、その表情から明白だ。

金色の髪とエメラルドの瞳を持つ美人。彼女の名は、エルシーク。クロテニア公国のお姫様だ。

彼女たちがクロテニア領を出発したのは、二週間前のことだった。目的地は、首都マイアール。エルシーク姫の婚約者であるスカロン卿に会うためだった。

スカロン卿は、フレグランド公爵家の長男だ。

しかし、フレグランド家を継がず、クロテニアの入り婿になることが決まっていた。そこで、スカロンがクロテニア公国に行く前に、エルシークがフレグランド家へ挨拶に行くことになった。旅の途中で襲われるとは予想してなかったが、万が一に備えてギルド（魔法使いの傭兵集団）に護衛を頼んでおいた。それが功を奏した。

「あの襲って来た連中は何者だ？ あんた、誰かに恨まれてるのかい？」

エルシークにぞんざいな口を聞いたのは、コーディーだった。彼は、一国の姫に対しても臆するところがなかった。

「さあ、見当もつきませんわ」

無礼な態度に怒ることもなく、エルシークは答えた。コーディーとは二年前にも旅をしたことがあった。それで、わりと気軽に話せる。しかし、その時は、エルシークは人の姿ではなかった。

「とにかく、気をつけないとな。この先だって、どんなことが起きるか判らないぜ。襲って来た連中は、クロテニアから連れて来た精鋭部隊をここまで叩いたんだ。ただの盗賊の仕業じゃないからな！」

「じゃあ、わたくしと知っていて襲って来たんですの？」

エルシークの表情が不安に曇る。

「そんなに心配すんなよ！俺様が守ってやるって！」

コーディーは、白い歯を見せて笑った。

そんな言葉をかけられても、エルシークの心は晴れない。

「何だよ、他にも不安があるのか……？もしかして、将来の旦那様に会いたくないとか？」

エルシークは、コーディーの質問に頷いた。結婚に関してはまるっきりの部外者であるコーディーだからこそ、エルシークも素直に頷くことができた。彼女の目は、少し潤んでいた。

「お前、カイルのことが忘れられないのか？」

エルシークは、ついに大粒の涙を流した。白い頬をつたうそれは、どんな宝石よりも美しかった。

「彼には三年間も守ってもらったし、獣の姿から解放してもらった」

「でもよ、その三年の間も、あんたは獣の姿だったんだろ？そんな状態で恋愛感情なんて生まれるか？」

エルシークは、そっと目を瞑った。それは、遠い過去を身近に感じようとしている行為に見えた。

「もしもよ、あなたが一匹のミンクを飼うとして、それを一人の間として扱える？カイルはいつでも私を尊重してくれて、レディーとして接してくれた。彼の御陰で私は、獣の姿でありながら、公爵の娘でいられたの……」

「しかしな……」

コーディーが何か言おうとした時、出発の合図がかかった。

「エルシーク、目的地までは二三時間で着く。もう襲われることは無いと思うぜ！」

コーディーの言葉に、エルシークは頷いた。少しナーバスになっている様子だ。

御者がピシリと鞭をくれると、四輪馬車は動き出した。コーディーは、慌てて馬車の後ろに回ると、荷物を置く台の上へ座った。

実は、コーデイーは乗馬が苦手だった。

しばらくすると、栗毛色の馬に乗ったクリスが近づいて来た。

「エルシーク姫と何を話してたの？」

クリスの質問に、コーデイーは不機嫌そうに答えた。

「ガキには関係ない事！」

クリスは、馬首を巡らすと、その場から離れた。ちよつと頭に来たようだ。

コーデイーは、そんな事は気にせずに考え事をしていた。見上げると、青空に雲が一つ浮かんでいる。

フレグラント公爵夫人とベルク参謀官

マイアール市の片角で、スカロンとカイルが大暴れし、キルム街道ではエルシーク姫の一行が武装集団に襲われていた頃、市の中心部である王宮では、一人の男が溜め息をついていた。

「はぁ、情けないことになったもんだわい」

短い頭髮が半白になっているその男は、年寄りとも壮年とも取れるような顔立ちをしている。背は高い方なのだが、少し猫背だった。それが、彼をショボクレタ印象にしていた。鼻は見事なワシ鼻。眼光は意外と鋭い。その鋭さが、猫背の分を差し引いても、彼がいったしの野心家である証明になっていた。

彼の名はベルク。役職は参謀官。つまり、国王の治世を補佐する役目だ。

彼は、お気に入りの紅い法衣に皺や汚れがないのを確かめると、また溜め息をついた。

「わしが王国の実権を握ることができたら、故郷のマルタにも錦が飾れると言うのにのう」

ベルクの生まれはマルタと呼ばれる小さな島だった。そのマルタ島からマイア王国に上京して来たのだ。彼は、先王の代から三十年間

マイア王国に遣え、一介の騎士からこの地位に昇りつめた。今では、国王の近衛騎士団に対抗して、マルタ騎士団と言う私設軍まで持っている。その彼が、王国一ではないのだ。“それは国王が一番だから”と思うかもしれないが、まだ歳端もいかぬ現王は、この国のナンバー3だ。ナンバー1は他にいた。その人物は、後に紹介しよう。

さて、ベルクが今いるのは、王室に通じる控えの間だった。彼は、国王の謁見を待っているのだ。

「ベルク殿、どうぞ」

取り次ぎ役が彼を呼ぶ。ベルクは、椅子から立ち上がると、国王の御前に臨んだ。

王室の間の正面には、玉座があった。そこに座るのは、幼いキング、エイブレア三世。まだ年齢は九つだが、王であることには変わらない。

ベルクは、玉座に向かって敷いてある赤い絨毯の上を歩いていた。

両側には、近衛騎士団が並んでいる。ピカピカの白金の鎧を身に付けた彼等は、ベルクを脅かすかのように立っていた。

ベルクは、国王から五歩ほど離れた場所で膝まずいた。

「陛下には、ご機嫌麗しく、恐悦至極にございます」

ベルクは、いつも国王の隣にいたべき人物が居ないので、不思議に思っていた。

「あの女め、とうとう病気にでもなったかな？ それなら嬉しいのだが……」

少しは気が晴れて来たベルク。気分良く面を上げると、そこには現実が待っていた。いつの間にか、彼が病気になってくれたらいいと願っていた人物が、国王の隣にいたのだ。

彼女こそ、王国一の実力者フレグラント公爵夫人だ。

「ベルク卿、お待たせして申し訳ありません。わたくしが王宮へ上がるのが遅れてしまったものですから」

彼女は、今ここに着いたばかりらしい。玉座の後ろにあるビロードのカーテンの裏には、隠し扉がある。そこから直接入って来たのだ。つまり、そんな秘密の通路が勝手に使えるほど、彼女の地位は高かった。

「あゝあ、女の支度を待たなくてはならないほど、私は落ちぶれてしまったのかね」ベルクは、自笑気味に呟いた。

「何かオッシャって？」

フレグランツ公爵夫人の言葉に、ベルクは慌てた。

「いいえ、ただ、公爵夫人の美しさに、思わず溜め息が洩れただけでございます」

公爵夫人は、にっこり微笑んだ。その屈託の無い笑顔は、権力などとは全く無縁に思われる。そして、なにより美しかった。幼君、エイブレア三世とは孫ほども歳が離れている筈なのに、どう見ても親子にしか見えない。まるで、歳を取るのを忘れてしまったかのようだ。そんな彼女が王政を任されるようになったのは、二年前からだった。

彼女の夫、フレグランツ公爵は、王国の大臣の一人だった。どちらかと言うとうだつの上がない方で、目立たない存在だった。しかし、彼はとても幸せだった。何故なら、妻はとても美しい上に優しいし、息子のスカロンは十六才にして王国一の騎士と言われていた。そんな時、エイブレア二世が四十二才の若さで死に、わずか六才のエイブレア三世がその後を継いだ。

そして、先王の後を追うようにして、フレグランツ公爵は急死する。すると、公爵の後釜で大臣になったのは、その夫人だった。当時は誰もが、例え若すぎたとしても、息子のスカロンが後任につくものと思われていた。戦士出身の大臣も、別に珍しくはない。現に、当時から参謀官を務めていたベルクも、戦場で出世した叩き上げだ。だが、結局、夫人が大臣になる事は認められた。参謀官を含めた大臣は十二人もいた。その中で、夫人の役所は陛下のお守りだったからだ。つまり、権限が余り無い。

しかし、その後だった。異常事態が起きたのは……。それは、大臣達が次々と急死したのだ。残ったのは、公爵夫人とベルクだけになった。ベルクは、身辺警護のためにマルタ騎士団を造り、注意を怠らないように気を付けた。ベルクから見れば、犯人はフレグランド公爵夫人としか考えられない。彼が公爵夫人を恐れるのは当然だと言えた。それから、二年が経っていた。

大きな玉座の中で、陛下はグズがっていた。公爵夫人は、それをあやすかのように手を差しのべる。エイブレア三世は、彼女の手を握ると安心したようだ。二人の姿は、とても慈愛に満ちていて、まるで本当の親子のようだ。

「全く、国王を甘やかせ過ぎだわい」

ベルクは、心の中でぼやいた。

そんな時、凜とした声が、王室の間に響いた。

「ベルク殿、ナムル公国の反乱の事ですけど……」

公爵夫人の山ぶどうのような深い色の瞳が、じっとベルクに注がれている。彼女は、国政の話をする時でも、まるで午後のティータイムみたいにニコやかに話す。しかし、その内容は手厳しい。

「ナムル公国の反乱が起きてから半年、あんな小国に手間取るほど、マイア王国の軍事力はふがないのですか？」

ナムル公国は、十年前にマイア王国が植民地にした小国だった。ベルクは、ただただ平伏した。近衛騎士団以外の軍事力は、彼が握っていた。

「申し訳ございません。しかし、ナムル公国は天然の要害になっておりまして、なかなか攻めきれないのです」

「なるほど、勝負は時の運と言いますから、仕方のない事なのでしょう。しかし、それでは陛下のお立場がありませんわ。問題解決の具体的な案はおありのですの？」

公爵夫人は、相変わらずニコニコ顔で言う。彼女は、いつも軍事面は素人を装っていた。

「今後の具体的な対策でございますか」

ベルクは、ここが駆け引きのしどころだった。彼も、内心では『女なんかに負けてたまるか!』と思っている。彼には、反乱を鎮める三つの策があった。

1、国王陛下に陣頭指揮に立って貰えば、もっと大規模な軍事力を使うことが出来る。

2、スカロンを指揮官にして、近衛騎士団の精鋭部隊を送る。

3、ベルク自身が指揮官として、マルタ騎士団の精鋭部隊を送る。

この三つだった。しかし、1は駄目だ。ナムル公国はマイア王国の十分の一にも満たない小国だ。そこへ陛下のお出ましを願ったら、自分の無能ぶりをさらけ出す事になる。2は、陛下が動かないのに近衛騎士団を動かす事は出来ないから、駄目だ。つまり、最初から3しかなかった。

「わたくし自らマルタ騎士団を率いまして、必ずやナムル公国を鎮めて参ります」

公爵夫人は、ベルクの意見に難色を示した。

「ベルク殿、この広い王国で、あなたと私の二人しか大臣がいませんのよ。貴方には、幼いキングの為にもぜひ残っていただきたいの。だから、マルタ騎士団は誰かしっかりした隊長にでも預けて出陣させて下さい」

ベルク、これを聞いて目の前が真っ暗になった。それは、公爵夫人の狙いが判ったからだ。彼女の目的は、ナムル公国の反乱を鎮める事ではない。マルタ騎士団とベルクとを離すのが目的なのだ。勿論それは、ベルクを暗殺するため以外に考えられない。ことによると、ナムルの反乱も公爵夫人が裏で糸を引いているのかもしれない？しかし、ベルクは、公爵夫人の言う通りにするしか無かった。それが、国王に遣える大臣としての道だった。

「判りました。そのように致します」

「さすがはベルク殿、王国に対する忠勤ぶりには、いつでも頭が下がりますわ」

ベルクは、深く頭を下げて、退出の許可を取った。

「どうぞ、いろいろと準備がお有りでしょうから、今日の政務はよろしいですわ」

こうなつてくると、公爵夫人の笑顔は何より恐ろしい。

ベルクは、御前から離れながら呟いた。

「ふん、これでわしを殺せると思うなよ！」

ベルクは、から元氣を出そうとしていた。しかし、退室した彼を待っていたのは、更に悪い知らせだった。それは、市内にあるマルタ騎士団の小城の一つが、二人の男に潰された事と、エルシーク姫襲撃の失敗だった。

婚約者

カイルとスカロンは、キルム街道を南下していた。二人とも、かなり馬を急がせている。

「急げ、カイル！ エルシーク姫にもしもの事があつたら、取り返しがつかないぞ！」

盛んにカイルを励ますスカロンだが、自分の方が遅れている。

二人の乗る馬は、二頭とも素晴らしい駿馬だった。したがって、速度に差が出る理由は、乗り手の重量の違いだ。

カイルは、絹のような美しい肌の馬に跨っている。この馬は、脚がすらりと細く、その脚力はなかなかの物だ。五キロの道のりを時速四十キロで走り続けているのに、息一つ切らさない。

一方、スカロンは、黒曜石のような色の馬に跨っている。こちらは、脚がちよつと太めだが、持久力はカイルの馬に勝る。一日百キロ以上の強行軍も、この馬なら朝飯前だ。ましてや、たった五キロほどの道のりなら、準備運動にもならない。

二人がエルシーク姫の一行と合流したのは、襲撃事件が終わった後

だった。彼等が到着した時には、何もかもカタが付いていたので、せつかく駆け付けても剣の振るい所が無い。

カイルは、馬を馬車に横づけする。馬車の中には、懐かしい顔があった。

「カイル様、お久しぶりです」

エルシークが、カイルの顔を見上げていた。

真っ直ぐな眼差しで見つめられたカイルは、伏し目がちになる。

「二年ぶりですね……」

そんな時、思わぬ所から声が掛った。

「オイ、再会のキスでもしろよ!」

それは、馬車の後ろの荷台にいるコーディーだった。

コーディーにからかわれた二人は、たちまち紅くなった。

「コーディーさん、居たんですか?」

「おい、『居たんですか?』はないだろ!おたくらがノンビリお馬で駆けっこを楽しんでる間、誰がエルシークを守ってたと思うんだよ!」

コーディーにこう言われたカイルは、申し訳なさそうにしている。

そこへ、スカロンが到着した。

「エルシーク姫、お怪我はありませんか?」

エルシークは、未来の夫である男の方を見た。

彼は、いかにも戦士らしい風貌をしていた。顔の造りも豪快だ。それに、悪い人間には見えなかった。エルシークのスカロンに対する第一印象は、悪くはなかった。しかし、はっきりした理由もなく不安も覚えていた。

「初めまして、クロテニアのエルシークと申します」

姫の丁寧な挨拶に、スカロンは笑顔で答える。

「道中、お疲れでしょう。我が館でおくつろぎ下さい」

一国の姫ともなると、好きな相手と結ばれる事は諦めなくてはならない。エルシークは、カイルに想いを残しつつも、運命を受け入れる事を決めていた。

クロテニア公国の一行は、フレグラント家の城に向かった。
なだらかな丘を二つ越すまでの間に、三つの小楼がある。それが見えて来れば、フレグラント公爵領に入っている証拠だった。エルシーク達は、その中の湖畔に佇む城へ案内された。

エルシークは、淡いピンク色のドレスに着替えると、フレグラント公爵夫人にお目通りを願った。公爵夫人は、堅苦しいのは大嫌いとばかりに、謁見の間ではなく、私室プライベートルームで会おうと言う事になった。

「ようこそ、わたくしがモンテスパン・デュ・フレグラントですわ」
公爵夫人は、スミレ色のドレスを身に纏い、ビロードのソファに腰かけていた。その隣には、その場のリラックスした雰囲気をぶち壊すほどの重武装をしたスカロンがいる。

エルシークは、二人の向かい側に腰かけた。

「長旅で疲れたでしょう？」

公爵夫人は、黒い瞳を愛嬌たっぷりに輝かせる。その優し気な眼差しに、エルシークは好感が持てた。

「いいえ、そうでもありません」

そう答えたエルシークは、公爵夫人をじっと見つめていた。

「何を見ていらっしゃるの？」

公爵夫人の問いに、エルシークは答えた。

「公爵夫人があまりに若くて美しいので……まるでわたくしの姉のようなので……」

公爵夫人が、すかさず後を引き受ける。

「義理の母親には見えない……」

「はい」

「お世辞でも嬉しいわ。可愛いらしい方ね」

公爵夫人は、エルシークの手を握りしめると、顔を近付けた。これから話しの本題に入るらしい。

「息子の事、よろしく頼みますよ。クロテニアの方々と上手くやれ

るよう、貴方が支えて下さいね」

横で聞いていたスカロンは、たちまち恥ずかしくなった。

「母上、俺はガキじゃないぜ」

「いいえ、貴方は戦士としては一人前だけど、人としてはまだまだです。向こうへ行ったら油断してはいけませんよ」

公爵夫人は、息子に厳しく忠告した。

「ねっ、万事この調子なんだから。やっぱりクロテニアに婿に入っ
て正解だったんだ。母上はいつまで経っても俺を子供扱いするんだ
から」

スカロンは、エルシークに愚痴をこぼした。愚痴を聞かされたエル
シークは、にっこり微笑むしかない。

「あの……、一つ質問してもよろしいでしょうか？」

エルシークが遠慮がちに言う。

「どうぞ、お聞きになって」

公爵夫人の許可が出たので、エルシークは疑問に思っていたことを
聞いた。

「スカロン様が入り婿になった場合、フレグラント家は跡継ぎをど
うするんですの？」

公爵夫人は、返事を少し躊躇った。

「そうね、まだ本人には話してないけど、カイルに養子になっても
らおうと思っているの」

公爵夫人の返事を聞いて、エルシークは考え込んでしまった。な
んとかカイルと結ばれないものかと……。カイルがフレグラント家
の養子になってからエルシークと婚姻すれば、結局はクロテニア公
国とフレグラント家は結ばれる。

「どうかなさって？」

公爵夫人に声をかけられて、エルシークは自分の世界から戻って来
た。そして、慌ててその場を取り繕う。

「いえ、あの、さっきからカイル様の姿が見えないと思って……」
カイルの事に関しては、スカロンが知っていた。

「カイルなら、ベルク殿の呼び出しで、マイアールへ行ったよ」
エルシークは、気を静めるために紅茶のカップを手にとった。

「至急、貴殿に会いたい。マルタ騎士団総本部へお越し願いたい」
ベルク参謀官からの手紙は、フレグラント家の館でカイルを待っていた。スカロンが一緒に行くとしし出たが、カイルはきっぱりと断った。

「護衛を連れて行ったら、こちらが臆病だと思われるでしょう。だから、一人でいい」

そう言うものの、カイルの本心は別にあつた。それは、スカロンを危ない目に合わせたくなかったのだ。それが、エルシークのためでもある。

カイルは、厩^{うまや}へ向かった。そして、栗毛の馬を選んで中庭に連れ出した。すると、後ろから声をかけられた。

「おい、お出掛けかい？ カイル」

カイルに声をかけたのは、コーディーだった。傍らにはクリスマスもある。

「ええ、マイアールへね。ところでコーディーさん、何をお飲みになっっているんです？」

コーディーは、飲み口が付いた皮袋を持っていた。

「青菜の汁。これでも体に気を付けてんだ。あんたもせいぜい気を付けるこつたね。いろんな意味で」

コーディーらしくない飲み物に、カイルは少し驚いていた。皮袋の中身はてっきり酒だと思っていたのだ。

「ところで、リサリタさんはどうしたんですか？」

カイルのこの質問には、クリスが反応した。彼は、今にも泣きそうな顔をしている。

「それがね、いなくなっちゃったの」

ベソをかき始めたクリスに代わり、コーディネーが説明した。

「半年くらい前かな？ 俺にクリスを預けて何処かへ行ったきりだ。

まあ、あの女の事だから、心配ないと思うけど」

コーディネーは、軽く請け負う。しかし、クリスはそうはいかない。

「ねえ、カイル、何か手掛りがあったらすぐに知らせてね。お願いだよ」

クリスは、カイルに固く約束させた。

「ところで話は変わるけど、あのスカロンって奴は信用できるのか」
コーディネーが、意外なことを言い出した。

「もちろん！」

カイルは、胸を張って答えた。

「あんたの『もちろん』じゃなあ……。あんたは人が良いから」

カイルは、コーディネーの言葉に不安を覚えた。

「何か気になる事があるのですか？」

「別に……ただ、悪党は匂いで判るんだ。俺の鼻は敏感でね」

「同類にはね」

ぼそりと口を挟んだのは、クリスだった。

コーディネーは、小僧クリスの頭を小突いた。

カイルは、馬の背に跨った。あまりコーディネー達と話しもしていない。

「それでは、エルシーク姫の事をお願いします」

カイルは、馬の脇腹を蹴るとコーディネー達から遠ざかって行った。

「今日はマイアールに泊まりか？」

コーディネーが、カイルの背に声をかける。

「ええ、宿は王宮に近い『金の鳩亭』に取ります」

カイルは、振り返って答えた。そして、もう一回脇腹を蹴ると、並

足から駆け足に変えた。カイルの姿は、小城の門を抜け、なだらかな丘へ消えて行った。

カイルは、馬を走らせながら三つの事を考えた。第一は、リサリタの事だ。二年前の旅の時、可愛いらしい笑顔を見せてくれた金色の髪の子。確か、宿で唄も歌ってくれた。その彼女が行方不明なのだ。

「無事であって欲しいけど……」

カイルは、彼女の事が心配だった。

第二は、スカロンの事だ。スカロンとの付き合いは半年ほどになる。カイルは、その頃からフレグラント家で世話になっている。半年間、兄弟同然に付き合ってきたが、本当はスカロンの事を何も知らないのではないかと思い始めていた。そう思ったきっかけは、コーディの一言が原因だった。

第三は、ベルク参謀官からの呼び出しだ。

今、いちばん自分に関わる事なのだから、第一番に考えそうなのだが、カイルの性格だと他者を優先させてしまう。

ベルク参謀官の用件は、すぐに見当がついた。マルタ騎士団の小城の一つで暴れた事に違いない。

「下手をすると首が飛ぶな」

カイルは、ひと事のように呟いた。彼と同罪のスカロンは、フレグラント家の後ろ盾があるので命を取られる事はないだろう。

そんな事を考えている内に、マルタ騎士団の本部へ到着した。

ベルク参謀官の私邸も兼ねているマルタ騎士団の本部は、とても大きくて立派だった。カイルは、格子門の前に立つ番兵に取次を頼んだ。

ヴァンパイアの影

執務室の机の上には、何百人もの名前が載った資料があった。それをじっと読んでいるのは、ごま塩頭の中年の男だった。ワシッ鼻に鋭い眼光の彼は、しきりに何かぶつぶつと呟いている。

「ベルク様、よろしいでしょうか？」

ノックの音と共に、執事長のロイドの声がした。

「お入り」

ベルクが入室を許可した。すると、ドアが開き、ロイドが姿を現す。

「カイル殿がいらっしゃいました」

「すぐに通しなさい」

「剣帯してますが？」

ロイドの言葉を聞いて、ベルクはちよつと考え込んだ。

「別に逮捕したわけではないから、そのまま構わない」

そう言われても、ロイドは更に気を回す。

「控えの間に兵隊を入れて置きますか？」

ベルクは、いらいらした様子で叫んだ。

「ロイド、カイル殿に危害を加えるつもりはないんだ。すぐに彼を通したまえ！」

ロイドは、慌てて下がって行った。

暫くすると、カイルが通されて来た。ベルクは、目の前の逞しい若者を、じつくりと観察した。

「カイル君、君は腕っぷしに自信があるようだね」

ベルクは、猫撫で声を出した。

「なんだかおかしな雲行きだな？」

カイルは、心の中で呟いた。

「はい、多少は覚えがあります」

ベルクは、その答えを聞いてニンマリと笑った。

「タルーク運河辺りでは派手に暴れたそうじゃないか？」

「やはりそう来たか！」カイルは、予想通りの答えが返って来たので安心した。変に褒められると、かえって気味が悪い。

「その件に関しましては、わたくしにも言い分があります。処分をするなら、それを聞いた上でどうぞ！」

カイルは、ベルクの顔をキッと見据えた。その真っ直ぐな瞳は、有無を言わさぬ意思の強さを感じさせた。

「カイル君の言いたい事は知ってるつもりだ。クロテニアのエルシーク姫に手を出すなど言うのだろうか？」

意気込んで言おうとしたことを先に相手に言われてしまった。カイルは、出鼻を挫かれる形になった。

「まあ、立ち話もなんだ。君も座りたまえ」

年長者の余裕といった態度で、ベルクはカイルに椅子を勧めた。

カイルも立派な紳士だ。丁寧な態度で相手が接して来たら、例え敵でも礼儀はわきまえる。

「失礼します」

カイルは、素直に椅子に座った。

「君と話すのは初めてだったな、カイル君」

「はい、閣下とは縁が薄いらしくて」

「縁が薄いのは、君が私の部下を痛めつけてばかりいるからじゃないかな？」

「はい、どうもそのようです。今日もこの屋敷の中で、マルタ騎士の方々に睨まれましたから」

カイルは、平然と言ったのけた。

「今後は手加減してもらわないと、これからマルタ騎士団には、王国のためにナムル公国で働いてもらわねばならないから」

「ナムル公国？……戦争ですか？」

カイルの質問に、ベルクは答えた。

「その通りだ」

カイルは、間髪入れずに言った！

「わたくしも参加させて下さい！」

カイルは、戦争が好きで志願した訳ではない。ただ、従軍すれば、エルシークの婚礼を見ないで済む。そして、全てを忘れられる。しかし、カイルの切なる申し出は、あっさり却下された。

「君は戦うのが好きらしいが、今回は駄目だ。参加するのはマルタ騎士団だけだから、君が一人混じったら、これ幸いと周りの味方に殺されてしまう。君みたいな戦士を失うのは、国に取っても損失だからね」

ベルクは、例の猫撫で声で言う。

「ずいぶんと僕を大切にしてくれるけど、何だろう？」カイルは、口の中で呟く。

「今日、君を呼んだのは、マルタ騎士団の小城で暴れた事を聞いたです為ではない。君に相談があるんだ」

ベルクは、真顔になった。これから本題に入るらしい。

カイルは、ますます警戒した。大臣ともあろうものが、一介の騎士に脅しではなく相談とは……。多分、ろくな話じゃない。

「実は、マイアール近郊で不思議な事件が起きているんだ」

ベルクは、机の上の資料をカイルの前に差し出した。

「見たまえ、二十年前から起きた奇妙な殺人事件の犠牲者の名簿だ」

カイルは、数ページを捲って見る。そこには、犠牲者の身元と殺害場所、そして死因が書かれていた。

「閣下、これは……」

カイルは、死因を読んで嘔然とした。

「そう、どれもこれも血を吸い取られている。そして、獣の牙の痕が死体にはついている」

カイルは、黙り込んでいた。

ベルクは、構わずに話を続けた。

「明らかに、人の血を吸う魔物が存在している。伝説の化け物、吸

血鬼だ。こいつは、二十年前から現れ始めた。丁度、フレグラント公爵が今の夫人と婚姻した頃だ」

「まさか、公爵夫人が吸血鬼だ！　とでも言うのですか？」

カイルは、驚いて叫んだ。

「そうは言っておらん。ただ、犠牲者の中には、十人の大臣とその後釜だった五人が入っている。そして、フレグラント公爵の死にも不審な所がある」

「やっぱり、吸血鬼の正体は公爵夫人だと言いたいんじゃないか！　カイルは、心の中で思っていた。

「吸血鬼の話はこれぐらいにしておこう。別に証拠がある訳でもないし……それに君は、公爵夫人派だろうからな！」

ベルクの放った捨て台詞に、カイルは反応した。

「ことわっておきますが閣下！　わたくしはどちらの派にも属しておりません！　ただ、正しい事のために剣を振るうだけでございます！」

カイルは、キッパリと言い切った。

「そこまで言うなら、カイル君、もし私が不審な死に方をしたら、真実を究明してくれると誓えるかね？」

ベルクの真剣な眼差しに、カイルは一瞬たじろいだ。しかし、はっきりと答えを出した。

「もちろんです。閣下！」

「もしも、公爵夫人やスカロンと対立することになっても？」

「はい、騎士の誓言ですから！　しかし、閣下も今後、エルシーク姫に手を出した場合、その責任は取っていただきます」

ベルクは、暫くカイルの凛々しい顔立ちを見つめていた。

「カイル君、ご苦労だった。話はこれだけだ」

ベルクは、退出の許可を出した。カイルは、立ち上がってお辞儀をすると、退室した。力強い足音が聞こえなくなる頃、ベルクは呟いた。

「期待通りの単純野郎だな、カイルと言う若造は……。あんな頭の固い騎士共は、十年も前に絶滅したと思っていたのに、まだ生き残っていたとは……。それにしても、これで一安心だ。私が不審な死に方をすればカイルが動き出す事をあの女が知れば、簡単には手出しできない筈だ。欲を言えば、カイルの奴が公爵夫人とスカロンを殺してくれば助かるのだが……」

ベルクは、夜が更けるまで陰謀を巡らせていた。

夜の散歩

エルシークと公爵夫人、それにスカロンの三人による談笑は、四回目の蠟燭を取り替えるほど続いていた。公爵夫人の知的な話題や、スカロンの豪快な冒険談に、エルシークは驚いたり笑ったりで、飛ぶように時間は過ぎて行く。

「もう、夜も遅いですわ、エルシーク。お休みになったら？」

公爵夫人が声をかける。エルシークは、それに従った。

「そういたします義理母。おかあさまもう、お母様ってお呼びしてもよろしいでしょ？」

「ええ、遠慮しないでドンドン呼んでちょうだい！」

エルシークは、スカートの端をちょこんとつまむと、公爵夫人にお辞儀をした。公爵夫人もお辞儀を返す。

「エルシーク、僕の太陽！ 明日もきつと輝いておくれ！」

スカロンは、大げさな台詞と共に近づくと、エルシークの前にひざまずく跪いた。そして、その手に接吻する。

こうして、大変なセレモニーと共に、エルシークは退室したのだった。

「どう？ あの娘は？」

公爵夫人がスカロンに聞いた。

「なかなか美味しそうな女だね」

スカロンの答えを聞いて、公爵夫人は苦笑いをした。

「まだ血を吸っちゃだめよ」

「判ってるって。俺があの子と婚礼を挙げてからだろ？」

「そう、それに、エルシークより先にクロテニア公爵を殺さなきゃ。そして、お前が跡継ぎになって暫くしてからだね。あの娘の血を吸うのは……」

公爵夫人は、恐ろしい陰謀を平気で話していた。

「なんだ、当分さきの話か……。それまで我慢できるかな？」

スカロンは、大欠伸をした。その口の中に、異常に長く伸びている犬歯が二本あった。

「駄目だ！ 若い女を見ると牙が出る！ ゲップしたり屁が出るのと一緒に、自分じゃ抑えられないんだな！」

スカロンは呑気に言う。

公爵夫人は肩を竦めた。

「メールー、メールー！ 居ないの？ 蠟燭を持って来て！」

公爵夫人が呼び鈴を鳴らして叫んだ。

若い小間使いがすぐにやって来た。赤毛の髪の小さな娘で、胸が大きい。

「部屋中のじゃなくていいのよ。テーブルの上の三本だけで」

メールーは、蠟燭を持って近づいて来た。そばすの有るあどけない顔なのに、歩くとたびに胸が揺れている。

そしてそれは、突然の出来事だった。公爵夫人は立ち上がると、メールーを背後から抱きしめた。蠟燭が数本、床に散らばる。

「大人しくしなさい！ すぐに済むから」

公爵夫人は、メールーの口を手で塞いでいる。

スカロンは、小娘の白くてふっくらとした手を引き寄せた。そして、手首に噛み付く。口のまわりを血だらけにしながら、ごくごくと彼

女の血を飲み干す。

「ふうーっ」

スカロンは、一息ついた。小さなメーラーは、ぼろ雑巾のように床へ倒れる。

「また小間使いを雇わなきゃいけないわ」

公爵夫人が、呆れたような声を上げた。

「身寄りがなくて若い娘かい？」

スカロンが、ニヤリと笑う。

二人がメーラーに関して話したことは、それだけだった。彼らに取って人間は、ただの食料に過ぎない。

「ところで、ベルク参謀官殿はカイルに何の用事なのかな？」

スカロンが、口のまわりをハンカチで拭きながら言う。彼は、食事に満足したらしい。今は牙が引っ込んでいる。

「私たちへの牽制よ。あの狸じじい、『自分が殺されたらスカロンか公爵夫人が犯人だ。あの二人は人間ではない。吸血鬼だ』とでもカイルに吹き込んでいるんでしょ」

公爵夫人は、その美しい顔を歪めると、憎憎しげに話した。ベルクによっぽど恨みがあるらしい。

「カイルの奴だって、本当は不死身の吸血鬼なのにな」

スカロンが、ぼそりと呟く。

「そのことは本人には内緒よ。自覚がないんだから」

公爵夫人は、スカロンに言い聞かせた。

「あいつ、本当に俺の兄貴なのかい？ 牙も生えないし、女を見ても興奮しないぜ！」

「寺院騎士団に預けたのがまずかったわ。あの中で修道僧みたいな生活を送って来たから、吸血鬼の血が目覚めないのよ」

「あいつが目覚めるまで兄弟の名乗りはお預けか……母上も親子の名乗りを上げられないね」

二人は、深い溜息をついた。

「スカロン、話は変わるけど、エルシークが帰る時、あなたも一緒にクロテニアへ行くのよ」

「随分と急だな。ベルクのじじいがまた部下を差し向けて来るのか？」

「その可能性は充分にあるわ。フレグランとクロテニアの両公爵家が手を組んだら、あの爺さんの最後なもの」

「それだけ必死だってことか……」

「そう言うことね」

公爵夫人はうつとりするような笑顔で答える。そして、おもむろに右手を差し出した。

スカロンは、その手に接吻する。

「私はもう寝るわ。スカロン、あなたは食べカスを捨てていて」
食べカスとは、床に放置してあるメーラーの事だ。

「どうしたらいい？」

「いつものように重りを付けて湖に投げ込めば？ 後は魚が食べてくれるでしょ」

公爵夫人は、冷たく言い放った。

満月が、青白く輝いていた。一人の男が、肩に麻袋を担いで歩いている。

「血を吸うのはいいけど、後の処理が面倒だよな」

男は、ぶつくさと文句を言いながら歩いている。

彼は、大きな体をしていた。動物に例えるなら、猛牛のような印象を受ける。重装備の鎧をガチャガチャいわせ、大きな剣を背負っていた。

彼の目的地はすぐ目の前にあった。それは、月光を反射してキラキラ光る湖だった。

湖の畔に立つと、麻袋をどつかと降ろす。目の前は船着場だった。彼は、麻袋を船に寄せ、岸から遠い所で捨てるつもりだった。何故なら、麻袋の中身は発見されてはならない物だからだ。

小船は、杭に繋がれてぶかぶかと浮かんでいる。男は、綱を引っ張って小船を引き寄せた。

そんな時、彼等に声をかけられた……。

「スカロンの旦那、こんばんわ！」

見ると、スラリとした背の高い若者が立っていた。その隣には、小さな男の子がいる。少し距離があるので、月明かりだけでは相手の正体が判らない。若者と思うのも、声の様子から判断したに過ぎない。

「誰だ！」

スカロンが聞き返す。

「昼間に会ったばかりだろ？ もう忘れたのか？」

声の主は、スカロンに近づいた。月明かりに、お互いの顔が判別できた。スカロンは、相手の顔に思い当たった。

「ああ、コーディー君だったかな？ エルシーク姫の護衛をして来た……」

コーディーの黒い瞳は、悪戯っぽく輝いた。

「ああ、だからあくまでエルシークを守るつもりさ」

コーディーは、なんとなく意味あり気に言う。

スカロンは、その場の気まずい雰囲気にとまりかねていた。仕方なく、相手の様子を探るかのように話しかける。

「夜の散歩かい？」

「いや」

コーディーは、面白くもなさそうに答える。そして、皮肉っぽく微笑むと、逆に質問した。

「あんたこそ、こんな夜中に何をしてんだ？」

「ただの散歩だよ」

「へえーじゃ、その麻袋の中身はなんだい？ お弁当にしちゃでないぜ」

コーディーは、再び意味あり気に言った。

「こいつ、何か知ってやがるな！」

スカロンは、心の中で呟いた。

スカロンの疑問に答えるように、コーディーが叫んだ。

「まさか、赤毛で乳がかい、若くて可愛い小間使いじゃないだろうな！ その袋の中身はよ！」

それを聞いて、スカロンは確信した。

「こいつ、何処かで見てたな！」

もちろん、秘密を知っている者には死んでもらわなければならない。

スカロンは、暗い声で答えた。

「だったらどうだってんだ？」

スカロンの両目が、紅く光った。口には、異様に長い二本の犬歯が生えている。

「ついに正体を現しやがったな！ 化け物め！」

強がってはみたものの、吸血鬼を目の前にしたコーディーの声は、震えていた。

そんな時、スカロンは突然、後ろを振り向いた。その右胸に、剣がズブリと突き刺さる。

「急に振り返って悪かったな。急所がズレたか？ だがな、心臓を刺しても効果ないぞ！」

ニヤニヤと笑うスカロン。彼の目の前には、タックスがいた。

タックスの持つ剣は、物体を素通りして肉体を斬ることができる。

その為、鎧を着けたスカロンを簡単に刺すことができた。その他に彼は、異空間と現空間を自由に出入りできた。公爵夫人とスカロンの会話。それにメールーの哀れな最後をこっそり覗いたのは、その能力を使っていたからだ。そして今、再びその能力を使ってスカロンの背後から攻撃した。

しかし、その攻撃は無駄だったようだ。

「残念だったな！」

この言葉と同時に、スカロンの拳がタックスの顔面に炸裂した。タックスは、五六歩ほど後ろに吹っ飛ばされる。

「ふん、鞠のように飛んでいったぞ！」

スカロンは、余裕の表情でタックスを見送っていた。背後から近づくコーディーを、気にする様子もない。

「くたばりやがれ！」

コーディーは、スカロンの背中に氷の斧を叩き込んだ。しかし、相手は平然と背中を向けている。

「ちっ、やっぱり駄目か！」

舌打ちするコーディー。彼は、殺気を感じて間合いを空けた。刃風が前髪を揺らす。

スカロンが、振り向きざまに剣を振り回したのだ。

「貧弱な人間どもとヴァンパイアの違いを教えてやる」

牙を剥き出しにして笑うスカロンに、コーディーは恐怖心を抱いていた。

「違いは、牙の有る無しだろ？」

強がってはいるが、つい声が震えてしまう。

「なんだ？ 寒いのか？」

「風邪ひいちまってね」

「心配するな！ もうすぐ病とは無縁の世界に送ってやる！」

「やだね！ そこへはお前が行きな！」

コーディーは、地面を叩いた。すると、スカロンの足元から数十本の氷柱が突き出す。氷柱は、一本一本が槍のような大きさで、スカロンの体を下から貫いた。

「何だ？ 遊んでんのか？」

氷柱に体を貫かれているのに、スカロンは平然としていた。傷口か

ら血をダラダラ流しながら、氷柱をぶち折って歩いて来る。

「せっかく吸った血が垂れ流した。だが、お前ので補うから心配いらないぜ」

流石にコーディーも、少し絶望的な気分になっていた。心の迷いは体の動きにも影響する。コーディーは、あっさりスカロンに背後を取られてしまった。

「観念しな若造！一滴も残さず吸い尽くしてやる！」

スカロンが、大口を開ける。鋭い犬歯が、コーディーの咽に喰らいつく寸前だった！

「あんた、野菜は足りてるかい？」

コーディーは、スカロンの耳にこう囁くと、吸血鬼の口に青菜の汁が入った皮袋を押し込んだ！

「苦いイイイイイ！」

スカロンは、大声を上げる。そしてその声の勢いのままに、コーディーをブン投げた。

投げられたコーディーは、放物線を描いて湖の真ん中に落ちた。水飛沫が、夜の湖に輝く王冠を造った。

スカロンは、口に入った青菜の汁を吐き出した。湖水で口を濯ぐ。そんな時、夢中になってうがいをする彼の耳に、ある音が聞こえて来た。それは、馬の蹄の音だった。

「そう言えば、コーディーの隣に居たちっこいのが、いつの間にか消えてるぞ！」

スカロンは、再び耳を澄ませた。馬の蹄の音は、どんどん遠ざかっていた。かなりの速度で走っているらしい。スカロンは確信した。

「あのチビ助、カイルに知らせに行くつもりだな！」

そう呟いたスカロンは、意味不明の行動に出た。まず、剣を大地に突き立てた。そして、鎧を脱ぐ。

すると、彼の体に変化が現れた。どんどん毛深くなっていったのだ。

着衣もビリビリと破れ、体が一回り大きくなる。四つんばいになると、四足獣独特の体形に変化した。

数十秒後、そこには人だったスカロンの姿はなく、蒼い毛に覆われた巨大な狼がいた。そして、その狼は、風のように走り去った。

蒼い狼が走り去った後、湖にも変化が起きた。湖の真ん中から岸に向かって一直線に道ができたのだ。その道は、氷で造られていた。

コーディーは、氷の道の上に立つと、岸に向かって走りだした。

そして、あつと言う間に湖の真ん中から湖畔に戻って来た。

「寒い、風邪ひきそう」

コーディーは、服の端を絞りながら辺りを見回した。スカロンが残した剣と鎧を訝^{いぶか}しげにみる。そして、ある小さな物に目を留めた。それは、月の光を反射して輝いている。

コーディーは、光る物を手に取った。（青い聖なる剣を守るかのように紅い蛇が巻きついている）そんな絵柄が入った近衛騎士団の肩章が、その正体だった。コーディーは、それを暫く眺めていた。

「コーディー、大丈夫か？」

コーディーは、後ろから誰かに声をかけられた。振り返ると、そこにはタックスがいた。

「タックス、お前こそ大丈夫か？」

タックス顔は、スカロンに殴られた所が痣になって腫れていた。

「大丈夫に見えるか？」

タックスに聞き返され、コーディーは何も答えられなかった。

「ところで、クリスはどうした？」

気を取り直したコーディーは、今の状況を把握しようとしていた。

「クリスなら、馬でカイルの所へ向かったよ。だけど、スカロンの奴は狼に変身して物凄いスピードで追いかけて行った」

タックスの説明を聞いて、コーディーは呆れた。

「まったく、あの野郎は何でもありだな！」

コーディーは、暫く考え事をしていた。そして、いつになく真剣な眼差しになっていた。

「タックス、クリスの居る所まで飛べるか？」

「ああ、何とかなるだろう」

タックスの返事を聞いて、コーディーは次の言葉を躊躇^{ためら}った。しかし、意を決したように言う。

「タックス、頼みがある……。犠牲になってくれ……」

激闘

一方、カイルの元へと馬を走らせているクリスは、安心していた。スカロンは追いつけないと確信していたからだ。

しかし、安心するのはまだ早い。それを、これから知る事になる。

蒼い狼は、獲物をすでにその視界に捕らえていた。丸みをおびた馬の尻が、力強く動き、そこから繋がる脚が大地を蹴る。蹄が、泥を飛ばす。

蒼い狼の顔にも、その泥が飛んで来ていた。

もう、それほど近付いていたのだ。馬の乗り手は、蒼い狼の存在に全く気付いてないらしい。

蒼い狼は跳躍すると、馬の尻に飛びついた。

「ウオオオオー！」

恐ろしい獣の鳴き声が真後ろから聞こえた。クリスは、心臓が飛び出るほど驚いた。見ると、自分のすぐ後ろ、乗馬の尻の上に大きな狼がいるのだ！

「いつの間に！」なんて考えている暇は無い！ 瞬き一つの間で判断が遅れても、クリスの命は無い！ 狼の巨大な口で彼の体はバラ

バラにされてしまう！

クリスは、疾走する馬の前足に魔法力を流し込んだ。すると、馬の前足のみが地面にくっつく。馬体は走る勢いを殺しきれずに後足だけが持ち上がる。

馬は、勢いよく逆立ちするような格好になった。クリスも狼も、馬の上から投げ出される。

クリスは、草むらの中に落ちた。

一方の蒼い狼は、木に思いつきり激突した。

クリスは、草むらに隠れて震えながら狼を見ていた。

木に激突した狼は、動く様子がない。

「このまま死んでくれるといいんだけど……」

クリスは、切に願った。しかし、その願いは叶わないようだ。狼が、動き出したのだ。

蒼い狼は、思いつきり木に激突していた。それは、大人が腕を回せる位の幹がポッキリ折れている事からも判る。

「グルルルッ」

咽を鳴らし、怒りを溜め込む狼。もちろん、怒りの矛先は自分をこんな目に遭わせたクリスだ。

狼は、鼻をヒクつかせ、辺りの匂いを嗅いだ。どうやら、後ろの草むらにクリスは潜んでいるらしい。

狼は、振り返ると、草むらへ近づく。

暗闇に光る紅い目。長い鼻に刻まれる皺が、彼の怒りの度合いを表していた。歯茎が見える程に開けられた口には、ナイフのような牙が揃っている。

もうすぐクリスを引き裂ける興奮からか？ 大量に唾液が分泌されていた。これが、肉に牙の通りをよくする潤滑油代わりになるのかも知れない。

蒼い狼は、跳躍した！ 草むらに飛び込み、クリスに噛み付き、振り回す！

暫く我を忘れたようにクリスを地面に何度も叩き付けていたが、少しおかしい事に気が付いた。自分がくわえている物をよく見ると、それはフード付きのマントだった。

クリスは、汗が染み込んだ衣類を残し、何処かへ移動したらしい。狼は、再び風の中にクリスの痕跡を探した。

いっぽう、クリスは、必死にこの場から逃げようとしていた。草むらの仕掛けで稼げる時間はわずかだ。馬に追いつくほどの狼の脚力を考えると……。

クリスは、嫌な予感がして、後ろを振り返った。

「ああああっ！」

後ろから、紅い発光体が二つ、自分を追いかけて来るのが見えた。とても逃げ切れないと判断したクリスは、自分の魔法力を発進させる。地面に拳を当てると、丸い光が狼を目掛けて地上を走る。

クリスの魔法力は、迫る狼の前足を捉えた。

「え！ 何で？」

クリスは、思わず叫んでいた。普通なら、狼の足は地面にくっついて離れないはずだ。それなのに、狼は平気で走って来る。

クリスは、啞然としていた。しかし、それも束の間だ。執るべき行動は一つしかない。それは、ここで戦う事だ。逃げ切れる相手ではない以上、それ以外の選択は無い。

クリスは、体中の魔法力を搾り出し、手に集中させた。これを狼の体に拳で直接に流し込み、奴の体の機能を止めるつもりだ。

臨戦態勢で身構えるクリス。迫り来る蒼い狼。両者の激突は、すぐに優劣がハッキリした。

飛びかかった狼が、前足でクリスの体を弾き飛ばしたのだ。

飛ばされたクリスは、木に激しくぶつかって止まった。

「痛うう」

クリスは、狼に攻撃された時、自分の魔法力を相手に流し込んでいた。しかし、狼には何の影響もないようだ。それを見て、クリスは絶望した。

戦意を喪失したクリスに、狼は容赦しなかった。前足で何度も攻撃した。まるで、鼠をいたぶる猫のように、相手が傷つき血を流し、弱るのを楽しんでいる。噛み殺せば一瞬で決着がつく勝負なのに、蒼い狼は完全に遊んでいた。

「いい加減にしろ！」

クリスは、ブーツに隠してあったナイフを引き抜くと、狼の前足に突き刺した。

「ウウウッ！」

狼は、唸りを上げてクリスの体を弾き飛ばした。

前足に刺さったナイフを口で引き抜き、クリスを睨み付ける。狼は、思わぬ反撃を受け、完全に怒っていた。もう遊びは終わりだ。バラバラにしてやる。狼は、そう決心した。

飛びかかる狼。

クリスには、その攻撃を防ぐ手だてが無かった。絶体絶命の場面だ。その時、なにも無い空間にいきなり刀身が現れた。白銀に輝く反りのある刀。使い手は、あの男しかない。

「安心なさい」

タックスは、クリスに向かって一言だけ早口で告げると、笑顔を見せた。

一方の狼は、クリスに飛びかかる勢いのまま、タックスが開いた異

空間の入り口に飛込んだ。

狼が飛込むと、すぐに空間の入り口が閉じ、後には何事も無かったかのように静まり返っていた。

クリスは、あまりに突然の出来事に唖然としていた。

「夢を見ていたのでは？」

などと思ったりしたが、体は痛いし血も出ている。

―カサ、カサ、カサ―

クリスの耳に、誰かが近付いて来る足音が聞こえた。

「クリス、大丈夫か？」

森の暗がりから現れたのは、コーディーだった。彼は、クリスが乗っていた馬を引いている。

「ねえ、コーディー！ 今ね、でっかい狼に追いかけて、それで食べられそうになって、そしたらタックスが現れて、狼と一緒に異空間に消えちゃったの！」

興奮して話すクリスに、コーディーは冷静に対処した。

「ああ、ぜんぶ知ってるよ」

「ねえ、コーディー、タックスはどうなっちゃうの？」

クリスの質問に、コーディーはあっさりと答えた。

「あの化け物と異空間で一对一だ。結果は判るだろ……」

コーディーの言葉を聞いて、クリスは取り乱す。

「ダメだよそんなの！ 絶対にダメ！ タックスだけを犠牲にしちゃ可哀想だよ！」

クリスは、さらに抗議しようとしたが、コーディーの目を見て黙ってしまった。

コーディーは、とても哀しい顔をしていた。それは、クリスが今まで一度もコーディーの中に見出したことの無い表情だった。長い睫まつげ

毛を伏せたまま、クリスの方を見ようとしなない。

コーディーは、言葉を失っているクリスに語りかけた。

「もう、それ以上は何も言うな！ お前なんかより、あいつとの付き合いは俺の方がずっと長いんだ！」

コーディーの一言に、クリスはただ頷くしか無かった。

「俺はエルシークをあの湖畔まで連れて行くから、お前は早くカイルを呼びに行け。湖畔で待ち合わせだ。それから、あの狼の正体はスカロンだ。判ったらさっさと行っちゃまえ！」

コーディーは、クリスを馬に乗せると、犬でも追い払うような仕草をした。

いつもなら不満を洩らすクリスも、今回は素直に従った。

クリスが馬で駆け去る音が消えると、森は元の静寂さを取り戻した。コーディーは、暗闇の中で一人ぼっちになった。

その時、コーディーはとっぜん泣き出した。幼子のように、みっともなく声を上げながら泣き崩れた。

後編（前書き）

遂にヴァンパイアの血族が明らかに！さらに、意外な過去も明かされる。

後編

空が白み始めた頃だった。湖には濃い霧が立ち込め、幻想的な雰囲気を出していた。

湖畔に、大きな十字架が立っている。鈍い光を放つその十字架は、スカロンが獣に変身する前に地面へ突き立てた剣だった。

それを目印にするかのように、四人の男女は集まった。

「やっと来たかい、カイルの旦那。待ちくたびれちゃったよ」

カイルに話しかけたのは、コーディーだった。彼は、すでにいつもの調子に戻っていた。傍らには、エルシーク姫を伴っている。

「お待たせしてすみません。急いで来たのですが……」

カイルは申し訳なさそうに言う。しかし、カイルとクリスはかなり遠くから来ているので、それは仕方がない事だ。

「まっ、とにかくここに居るのはやばい！ フレグラント公爵夫人がスカロンの親だとすると、とんでもない化け物だからな！」

コーディーが軽口をたたいたその時だ。突然、彼らを脅かす声がした。

「誰が化け物ですか？」

その声は、ティータイムに交わされるような柔らかな声ではあった。しかし、カイルたち四人の背筋は寒くなった。特に、スカロンの凶暴さを目の当たりにしているコーディーとクリスは、動悸が激しくなるほど驚いた。

何故なら、その声はフレグラント公爵夫人のものだったからだ。

「こんな夜も明けきらぬ内から皆さんで何処にお出かけですか？ わたくしにお別れの挨拶も無しに……」

公爵夫人は、薄緑色のシンプルなドレスに身を包んでいた。髪も結

い上げずに下ろしている。その姿は、幻想的で美しかった。

カイルとエルシーは、クリスやコーディーの話を全部は信じ切れてなかった。そこで、本人に確かめてみる。

「公爵夫人は、人では無いのですか？」

カイルは、単刀直入に聞いてみた。

公爵夫人の答えは、コーディーとクリスの証言を証明するものだった。

「そうよ。バレちゃったのね。私とスカロンは人狼吸血鬼。それを知った貴方たちは始末しないとね」

公爵夫人は、にっこり笑うと何気なく言った。しかし、それ自体は恐ろしい内容だ。

「あんた、三対一で戦う気か？」

公爵夫人の余裕な態度に気押されながらも、コーディーは、問いかけた。

コーディーの問いかけに、公爵夫人は、意外な答えを返した。

「三対一……？ 三対二の間違いじゃなくて？」

この言葉が終わるか終わらないかの内に、異変は起こった。

突然、何も無い空間に刀身が現れたのだ。その刀は、そのまま縦に切れ目を入れた。空間に裂け目が出来、それがパツクリ開いた。そこには、素っ裸のスカロンの姿があった。

スカロンは、全身が朱に染まっていた。その血が誰の者かは、コーディーとクリスには予想がついた。

「公爵夫人の相手はあんたに任せたぜ。俺はスカロンに借りがある！」

コーディーは、カイルにこう告げると、スカロンへ向かって行った。

「スカロン！ タックスの仇を取らせてもらうぜ！」

コーディーは、右手に手斧、左手にナイフを発生させる。

一方、スカロンは、タックスから奪った刀をコーディーに投げつけた。

コーディーは、その刀を手斧で叩き落とす。

コーディーの足元に落ちたその刀を、クリスが拾った。

「クリス！ そいつはタックスの形見だ。大事に使えよ！」

コーディーは、クリスの目を見て呟いた。クリスは、その言葉の中に特別な意味を見出した。

スカロンは、狼に変身する前に自分で地面に突き刺して置いた剣を引き抜いた。

やはり、自分の慣れ親しんだ剣の方がいいらしい。

「今度こそ決着をつけてやる！ 逃げるなよ！」

スカロンの挑発に、コーディーは興奮する。

「ふざけるな！ それはこっちの台詞だ！」

二人は、いつきに間合いを詰めると、激突した。

スカロンの腕力から生まれる剣は、とんでもない威力を秘めていた。コーディーは、なるべく相手の空振りを誘い、スタミナを消耗させる作戦に出た。

「仲間の仇を取るにとしては、逃げ回ってばかりだな？」

スカロンは、からかうように問いかける。

しかし、それで冷静さを失うほどコーディーは馬鹿じゃない。逆にスカロンを挑発する。

「素っ裸で剣を振り回してる男に言われてもね？ 下の剣までブラブラしてるぜ。それよりあんた、狼に変身したらどうだい？ それとももう、変身するだけの力が無いのかい？」

スカロンの右の眉がピクピク動いた。どうやら、痛い所をつかれたらしい。

「人間ごときが舐めるな！」

スカロンが力任せに振り下ろした一撃が、コーディীর肩に入った。しかし、コーディীরは、その斬撃の勢いに逆らわず、体を一回転させた。

スカロンのこめかみを、コーディীরの踵が襲う。

スカロンの両こめかみから血が噴出した。たまらずスカロンは、コーディীরとの間合いを空ける。

コーディীরは、剣撃が来る所に氷の肩当てを発生させて、スカロンの攻撃を防いでいた。しかし、攻撃は完全には防ぎ切れなかった。その証拠に、コーディীরの左肩に血が滲んでいた。

一方、スカロンの方は、驚異的な回復力でこめかみの傷を治していた。しかし、小さな傷が残っている。それは、彼が本調子でないことを物語っていた。

タックスの犠牲は無駄ではなかったらしい。

その後は、互いに場所を移動しながらの激しい戦いが続いた。

コーディীরは、肩の負傷が体の動きに響き始めていた。出血したままなので、だんだんスカロンの攻撃に捕まるようになって来た。

そして、致命的な一撃を受ける！

それは、コーディীরの額を直撃した。手斧とナイフを交差させた防御は、スカロンの剣が粉碎した。

コーディীরの体が、後ろに吹き飛ぶ。普通なら、完全に即死だ。

コーディীরは、大の字になって動かなかった。スカロンのいる位置からだ、コーディীরの顔が草の陰で見えなかった。

「あの馬鹿野郎の脳みそが出ているところを見てやるか」

スカロンは、すでに勝利を確信して油断していた。

そんな彼が、落とし物を見つけた。それは、木と木の間で光っている小さな物体だった。スカロンは、コーディーよりもそっちに興味を持った。

「何だ？　これは？」

スカロンは、落し物に近づくと、それが何なのか確認した。

それは、（王を表す青い聖剣。それを守るように巻きつく紅い蛇）の紋様が描かれた近衛騎士団の肩章だった。

「俺の物が、何故こんなところに？」

スカロンは、不思議に思った。

その次の瞬間！首が落ちていた……。

暫くして、コーディーが、上半身を起こした。

彼の額には氷の塊があり、それには深い亀裂があった。

コーディーは、額の氷を消すと、スカロンを探した。

そして、ニヤリとする。

スカロンは、首を落とされていた。

その仕掛けは、こうだ。

まず、二本の木の間に近衛騎士団の肩章を置いておく。そして、木の上にタックスの刀をクリスが持つて行き、彼の魔法力でくっつける。

そして、勝利を確信して油断したスカロンが、肩章に気づいて木の間に首を突っ込む。そこへ、刀に跨ったクリスが、木に沿って落下して、スカロンの首を切断した。

さすがのスカロンも、首を切り落とされてはお終いらしい。

コーディーは、スカロンの亡骸に近づくと呟いた。

「ありがとタックス……。勝てたのはお前のお蔭だぜ」
傍らに居るクリスも、その場で黙禱を捧げた。

タックスにとって、これ以上の手向けの言葉があるだろうか。

霧の中の戦い

湖から立ち込める霧が、ますます濃くなって来た。すでに、湖畔に立つ三人の男女を包み込んでいる。

「フレグラント公爵夫人、なぜ多くの人の命を奪ったのですか？」
カイルは、公爵夫人に疑問をぶつけた。カイルの後ろには、エルシークが事の成り行きを心配そうに見つめている。

カイルに質問された公爵夫人は、小首を傾げて答えた。それは、とても可愛らしい仕草に見えた。しかし、話した内容は可愛らしいとは程遠い。

「そうね、カイルだって、豚や牛や鳥を当たり前に食べるでしょ。それと同じよ。私は人間ではないの。人間の血を吸うのは当たり前なのよ」

公爵夫人の返事を聞いて、カイルは決心した。腰の剣を引き抜くと、臨戦態勢で身構えた。

「あなたもせっかちな人ね。もう話し合いは終わり？」

カイルは、唇を噛締め、公爵夫人を睨んだ。

「もう、話す事は無いと思います。貴女を母と思い。スカロンを兄弟と思っていた昨日までの愚かな自分を呪います！」

カイルのキッパリとした宣言に、公爵夫人は溜め息まじりに答えた。

「問答無用ってことね……」

公爵夫人は、悲しげにカイルを見つめると、一歩ずつ後ずさりして行った。

カイルは、剣を構えたまま動けなかった。彼女を信じていた頃の思い出が甦り、後を追えなかったのだ。

「このまま逃げられてもいい」
そう思いはじめていた。

公爵夫人の姿が、霧の中に消えた。後には、静寂だけが残った。

カイルは、エルシークの方を向く。緊張を解いた脱力感から、頬が緩んでいた。

「姫、公爵夫人を逃がしてしまいました。でも、これでいいのです。あの人とは戦う事は出来ません」

エルシークは、そんなカイルを笑顔で包み込んだ。

「カイルのためにも公爵夫人のためにも、これで良かったと思います。愛する者を傷つけるほど、悲しいことはありませんから」

霧の中で抱き合う二人。

しかし、恐ろしい咆哮が、二人の平安をぶち壊した。

恐ろしい野獣の叫び声！

カイルは、慌てて声の方に振り返る。その方角は、公爵夫人が消えて行った辺りだった。

霧の中を何かの塊が近づいて来る。動きや形から、四足歩行の獣のようだ。

「エルシーク様、下がって！」

カイルは、エルシークに自分から離れるように指示した。

その直後、霧のベールを突き破って、それが襲い掛かって来た！
カイルに飛び掛ったのは、白い狼だった。狼は、カイルの肩に喰いついていた。

白い狼は、完全に奇襲に成功していた。その圧倒的な力でカイルを地面に捻じ伏せる。鎖骨を碎き、肉を引き千切る。狼は、その白い体をカイルの血で染めながら、勝利の雄叫びを上げた。

そして、白い狼は、死んだも同然のカイルを放っておいて、次の獲物を探した。その対象は、エルシークに他ならない。狼の紅く光る目が、怯えるお姫様を捕らえる。

「いやー！」

エルシークの絶叫が響き渡る。

血まみれのカイル。白い大きな魔物。全てが、彼女には信じ難い出来事だった。

しかし、現実から逃げるわけにはいかない。今の彼女にできる事は、逃げる事だ。それに、それがカイルから狼を引き離すことにもなる。エルシークは、霧の中を走り出した。

カイルは、完全に油断していた。そのため、狼にあっさりやられてしまった。

それは、公爵夫人との戦いが避けられて、ホッとした所への不意打ちだったのが原因だ。それに、エルシークを気遣ったのも、対応が遅れた一因だった。

地面に倒れ、動けない。体に力が入らないのだ。あまりに無力な自分に涙がでた。薄れ行く意識。生きることを諦めかけた。

「いやー！」その時、カイルの耳にエルシークの叫び声が届いた。

「そうだ、まだ死ねない！ あの人だけは守らなければ！」

そう思った時、カイルの内側から新たな力が湧いて来た。それは、休火山を揺すぶり起こすマグマのように、カイルの体を変化させた。

エルシークは、霧の中を必死に走っていた。

「傷を負ったカイルから狼を引き離したい」

その一心が、彼女の足を動かしていた。

しかし、無情にも、彼女は木の根に躓いて転んでしまった。

白い狼は、すぐそこに迫っていた。

白い狼は、ゆっくりと獲物に近づいた。恐怖に怯える獲物の顔は、

白い狼を満足させた。

目の前の獲物は、エメラルド色の瞳が綺麗な若い女だ。その美しい顔が食欲をそそる。食い千切って内臓をばら撒いたらさぞ気分がいいだろう。狼は、満足気に舌なめずりした。

白い狼は、エルシークに飛びかかろうとした。

その時、獲物のエメラルド色の瞳がこちらに合っていないことに気が付いた。エルシークの視線は、白い狼より後方に合っていたのだ。不審に思った白い狼は、振り返った。

そこには、黒い色の狼がいた。

黒い狼は、長い鼻に皺を寄せ、歯茎を剥き出しにした。白い刃物のような牙が、ズラリと整列している。

そして、黒い狼は、白い狼にいきなり襲い掛かった。

今度は、黒い狼の奇襲が成功した。白い狼（公爵夫人）は、喉をガツプリ咬まれてしまった。

白い狼は、前足の爪で黒い狼の顔を引き裂く。

黒い狼は、白い狼の首を咬んだまま、そこら中に叩きつけた。

二頭の魔獣はもつれ合いながら、湖の中に落ちた。

二頭の落ちた場所に波紋が広がる。

エルシークは、その場所を心配そうに見守っていた。

暫く、時が流れた。エルシークには、その時間がすごく長く感じられた。

突然、湖面が割れると、誰かが湖から現れた。その人物は、カイルだった。彼は、狼の姿から人の姿に戻っていた。そして、素っ裸だった。

カイルは、湖から上がるとその場に倒れ込んだ。そして、ピクリとも動かない。

エルシークは、カイルの傍に寄ると、首に手を当てた。そして、脈があることを確かめる。彼女は、やっと安心することができた。その後、公爵夫人が湖から姿を現すことは無かった。

「カイル、やっと終わったね」

エルシークは、カイルの耳元で囁きかけた。

それでもカイルは目を覚ます気配がない。裸のままだし、エルシーク一人ではどうにもならなかった。

そんな時、タイミング良く人影が近づいて来た。エルシークは、大声を上げる。

「こっちです。コーディーさん、クリスさん、私たちはこっちです！」

霧の中から現れた人影は、どんどんその数を増やしていった。エルシークとカイルは、大勢の人物に包囲されていた。この時になってエルシークは、それがコーディーたちじゃないと気が付いた。

カイルとエルシークは、紅い鎧に身を包んだマルタ騎士団に囲まれていた。それを率いているのは、もちろんあの人物、ベルク参謀官だ。

ベルク参謀官は、倒れている人物がカイルで、その傍らにいる女性がクロテニア公爵の姫君、エルシークだと知り、前に進み出た。

「これは一体どうしたことでございますか？ エルシーク姫」

ベルクの問いかけに、エルシークは答えた。

「フレグランツ公爵夫人とスカロンは吸血鬼だったのです。カイルは公爵夫人と戦って力尽きてしまいました」

ベルクは、カイルから同様の報告を受け、公爵夫人とスカロンを逮捕しに来ていた。それが、すでに手間が省けていた。後は、姫とカ

イルを保護して帰るだけだ。しかし、ベルクの頭の中には別の考えが浮かんだ。

「マルタ騎士団！ カイルを始末しろ！」

ベルクは、部下に命令した。それを受けて、倒れたまま動かないカイルを紅い鎧が取り囲んだ。それぞれが剣を抜き、振り上げる。

「やめて！」

エルシークが、カイルの上に覆いかぶさった。

ベルクは、かなり冷たい心の持ち主だったが、エルシークの身を挺してカイルを守る姿にホロリとした。しかし、それは一時の感傷に過ぎない。どちらにしても、彼はエルシークも殺す気だった。全てスカロンと公爵夫人の仕業にすれば、片がつく。ベルクは、二人の殺害を部下に命じようとした。

その時、首筋に虫に刺されたような痛みが走った。そして、真後ろから脅すような声が聞こえた。

「いい加減にしろ！ おっさん！」

声の主は、コーディーだった。彼はベルクに忠告した。

「おい、あんた、さっさと赤ピーマンを連れて引き上げた方がいいぜ！ 今、あんたの首筋に氷の種を埋め込んだ。俺がちよいと念じれば、氷の種が膨らんで、体の中からでっかい氷が飛び出すぜ」

ベルクは、コーディーの説明を聞いて観念した。指導権はこの若造に握られている。

「わかった、降参だ。氷の種を取り出してくれ」

ベルクの頼みを、コーディーは断った。

「そいつはできないね。だけど、俺から離ればそいつは自然と解けちまうよ」

「どれくらい離れば、溶けるのかね？」

コーディーは、イライラした口調で答えた。

「それをあんたに教えて、俺に何か得があるのか！？」

ベルクは、たかが魔法使いの若造に威張られて頭に来ていた。

「今日、君と会った記念に名前を聞いておこう」

名前を聞かれたコーディネーは、すかさず答えた。

「俺の名前はハルロイだよ！」

コーディネーは、思いつきり偽名を答えた。意外と彼は用心深い。

「ハルロイ君か……。これからは気をつける事だね」

ベルクの脅し文句は、コーディネーの癪に障った。

「いつでも来やがれ！ てめえなんか恐かねえや！」

ベルクは、マルタ騎士団を連れて立ち去った。

湖畔には、コーディネーとクリス。それにエルシークとカイルが残っていた。エルシークは、カイルの体に覆いかぶさったまま、目を瞑って震えていた。先ほどのコーディネーとベルクの会話も気づいていないらしい。それだけ彼女は必死だったのだ。

「お姫さん、終わったぜ」

エルシークは、コーディネーの声に気が付くと、顔を上げた。

すると、コーディネーとクリスが笑顔を見せている。

「よく頑張ったな、お姫様」

コーディネーの労いの言葉に、エルシークは思わず泣き出した。

「泣くことないぜ。スカロンは倒した。吸血鬼^{ヴァンパイア}の血族はいなくなっ
たんだ」

コーディネーの言葉は間違いだった。一人だけ残っている。だが、その場の誰もがその事に触れずにいた。

エピローグ

三日月の夜だった。

ギシ、ギシと、何か大きな車輪の付いた物体が動いていた。その物体には覆いが掛っている。

馬に引かれ、人間に押されて動くそれは、ゆっくりと目的地に向かう。

そして、それは一台だけでは無かった。

やがて、小高い丘の上に来ると、眼下に村が見えた。

村は、数百戸の民家が点在し、まだ灯りがともる所が多かった。

おそらく、その中では、家族が楽しい一時を過ごしているのだろう。

村の様子を窺った彼らは、牽いて来た物体の覆いを外した。

それは、移動式の投石機だった。

人夫が、力を合わせて綱を引っ張った。

すると、巨大な振り子式の錘が持ち上がって行った。

振り子式の錘の反対側には投石機の腕の部分が伸びている。その腕の先端には、発射物を置く台が有り、既に石がセットされていた。

石には、油を染み込ませた縄が巻いてある。それに、火が付けられた。

小高い丘の上で、二十個の火の玉が辺りを照らす。

それは、村を脅かすかのように夜空を赤く染めた。

「発射！」

この掛け声と共に、振り子式の錘は解放された。轟音と共に、地面に向かって勢いよく落下する。錘と振り子の遠心力は、投石機の腕に伝わった。腕は、強烈な風切り音をあげて撥ね上がる。そして、火の玉を村に向かって投げ込んだ。

二十基の投石機から投げ出される火の玉は、次々と村に落下して行った。

あちこちに火の手が上がり、村全体が暗闇の中に浮かび上がった。

振り子式の錘を引き上げ、石をセットする。

次の発射の準備だ。

その時、不幸な事件が起きた。

投石用の石をセットする係りの男の服が、石と台の間に挟まって抜けなくなっていたのだ。

「火を付ける前に気がついて助かった」

その男は、そう思っていた。

石は、二人でセットする代物で、一人では動かせない。その不運な男は、相棒に声を掛けようとしていた。

その時、別の所で声が上がった。

「発射！」

次の瞬間、不運な男は空を飛んでいた。

不運な男は、村に向かって飛んで行った。村は、全体が燃え盛っていた。彼は、まるで自分が炎に飛込む虫に思えた。

上空から、味方の兵士が村を取り囲むように動いているのが見えた。その姿は、まるで蟻のようだった。

兵士の数は三万人。この大部隊が、たった千人弱の小さな村を襲うのだ。だが、それだけの兵力を使うには訳があった。

さて、不運な男は、味方の遙か頭上を飛び越え、村の中に入っていた。

炎上する家。逃げ惑う人々。叫び声が四方から聞こえた。まるで、地獄を見るようだった。

そして、不運な男にも終わりの時が迫っていた。

彼の進行方向に、教会が建っているのだ。
不運な男は、グングン教会に近付く。

そして、教会の鐘楼にある大きな鐘が、すぐ目の前に迫った。

へグワーン、グワーン

村の中心に位置する教会の鐘が、けたたましく鳴る。

だが、村の人々はそれを気にするだけの余裕がなかった。

なぜなら、何の前ぶれも無く、空から火の玉が降って来たからだ。

家を押し潰し、人を押し潰し、焼き払う。

火の玉に押し潰された母親。その側で泣きじゃくる子供。

焼け死んだ子供の側で放心状態の母親。

逃げ惑い、叫ぶ人々。地獄のようなこの光景も、まだほんの序の口
にしか過ぎなかった。

本当の恐怖は、火の玉の後にやって来た。

飛来していた火の玉が、ピタリと止まった。

逃げ惑う人々は、少しホッとした。

「ぎゃあー」

それも束の間、突然の悲鳴が村全体に響き渡る。

紅い鎧に身を固めた兵士が、村に侵攻を始めたのだ。

紅い兵士達は、問答無用で村人を襲った。一人を取り囲み、周り中
から槍を突き刺した。倒れ込み、動けなくても容赦しない。槍を突
き刺したまま押さえ付け、首を切り取った。

その行為は、老若男女を問わなかった。

「マルタの戦士達よ！ 村に居るのは人では無いぞ！ ヴァンパイアだ！ だから情けは無用！ 女や子供とて油断するな！ 確実に首を切り取れ！」

馬上の騎士が大声で叫ぶ。

火と血に昂奮している戦士達は、その言葉にさらに後押しされた。

実は、この村は伝説の吸血鬼、ヴァンパイアの村だった。

しかし、その恐怖の伝説が嘘みたいのに、次々と殺されていた。

それもその筈、ヴァンパイア達は何百年も前から戦う事を忘れていた。

彼等の祖先は、人間達と戦い、今の村を守り続けた。そして、その圧倒的な強さから、誰もヴァンパイアの村を襲う者はいなくなった。月日が流れ、ヴァンパイアは戦う事を忘れた。

それどころか、生き物を殺す事さえしない。

なぜなら、ヴァンパイアは血を吸うために羊を飼っているが、複数から少しずつ吸っているのので、家畜の命を取る必要が無かった。ちなみに、家畜を羊にしたのは、食料と同時に衣料も取れるからだ。

こうして、無力なヴァンパイアの村は、全滅しつつあった。

さて、この村にはザインと言う若者が住んでいた。

彼は、肩幅の広い、体格の良い男だ。顔立ちは角張っていて、目鼻口が中央に集まっている。一見すると人の良さそうな男だった。

彼は、結婚して子供が産まれたばかりだった。

この騒動が始まった頃、彼は友人の家に居た。

だが、火の玉が降ってくると、妻子のいる自分の家へ走り出した。

「アリシア、サーシャ、どうか無事でいてくれ」

ザインは、心の中で何度もこの言葉を繰り返しながら、家路を急いでいた。

燃え盛る家が崩れてくる。逃げ惑う人々とぶつかる。

ザインは、やっとの思いで妻子がいる筈の我が家に戻って来た。

ザインは、その場に呆然と立ち尽くしていた。

彼の家は、火の玉の直撃を受け、炎上していた。

「嗚呼アアア！」

ザインは、声にならない叫びを發した。

そんな彼を、複数の紅い兵隊が取り囲む。

「こいつ、泣いてやがるぜ！」

悲しみに倒れ臥したザインに、冷笑を浴びせる兵隊達。

ザインの体は、小刻に震えていた。

「よし、一思いに首を撥ねてやろう」

兵隊の一人が、腰の剣を引き抜いた。

白刃が、炎の照り返しを写して紅く燃えていた。

「覚悟しな、化け物」

残忍な笑みを浮かべ、兵隊は白刃を振り降ろした。

しかし、渾身の一撃は、ザインの首に届く寸前で止まった。

その場の兵隊達は、攻撃を止めた物を見て背筋が寒くなった。

それは、手だった。

しかも、大きさが半端じゃない。さらに、灰色の毛に覆われていた。その不気味な手は、ザインの物だった。

その後のザインの体の変化は、あつと言う間だった。まるで、小男の着ぐるみを着ていた大男が、窮屈な殻を脱ぐように、服を引き裂いて灰色の体毛が出て来た。

口が裂け、顎と鼻が前にせり出す。耳はとがり、位置が移動した。これは、ザインの頭蓋骨そのものが、人間で無い物に変化しているのだ。

変化は頭だけでなく、体も四つ足の動物に変わっていた。

ザインは、巨大な灰色の狼に変身した。

慌てたのはザインを取り囲んでいた兵隊達だ。

ザインの変身は、彼らにとって全く予想外の出来事だからだ。

もちろん、この兵隊達もヴァンパイアが狼に変身することは知っていた。

ただ、満月の夜にしか変身できない筈だった。だから、三日月の夜を狙って村を攻撃したのだ。

兵隊達は、狼の体に剣を突き立てた。

回り中から繰り出された剣は、狼の体に刺さって抜けなくなる。

一方、剣で刺された狼は、余裕の表情だ。ニヤリと口元を綻ばせると、まるで濡れた体から水の滴を飛ばすように、ブルブルと体を震わせた。

狼に剣を突き刺していた兵隊達は、その動きに合わせて振り飛ばされた。

五人の紅い兵隊を十歩も先に吹き飛ばした狼には、五本の剣が突き刺さっていた。

灰色の狼が、体に力を入れると、五本の剣はポロポロと抜けて行った。

傷口から血が噴出すが、出血はすぐに止まった。

灰色の狼ザインの怒りは止まらなかった。
次々と紅い兵隊に襲いかかる。

頭蓋骨を噛み砕き、そのまま首を捻じ切る。

両前足で同時に二人の兵隊の頭を叩き潰す。爪が兜を突き破り、首が体に埋没した。

後ろから忍び寄る不屈き者は、フサフサの尻尾をお見舞いする。

尻尾と言えども侮れない。それを喰らった兵隊は、鼻血を出して気絶する。

目に写る全ての者を殺戮しかねないほどの勢いで、灰色の狼は暴れ回った。圧倒的に有利だった三万の軍勢は、たった一匹の魔獣の出現でパニックに陥った。

通い慣れた道。見知った建物。そして、愛しい人々。それらを壊されたザインは、紅い兵隊どもに復讐し続けていた。

血の海と死体の山を造りつつ、ザインは獲物を求めて移動した。

そんな時、憎つくき紅い兵隊以外の者に出くわした。

それは、二人の子供を連れた若くて美しい母親だった。

そして、その親子はザインも見知った人たちだった。

「ケイト、無事だったのか？」

狼の姿のザインは、ケイトに話しかけた。

話しかけると言っても、直接言葉を発する訳ではない。念テレパシーのようなもので意思を相手に送るのだ。

「ザイン？ お隣のザインさんですか？」

ケイトは、それが癖なのだろうか？ こんな状況にも関わらず、えらく間伸びした話し方だった。

彼女は、黒髪の豊かな女性で、村一番の美人だった。つい最近、病でご主人を亡くされ、女手ひとつでスカロンとカイルと言う名の二人の男の子を育てていた。カイルは五才。スカロンは産まれたばかりだった。

ところで、ザインとケイトは、お互いの無事を喜んでいられる状況じゃなかった。

いくら獣に変身したザインが強くても、相手は三万人の兵隊だ。とても敵う筈がない。

「ケイト、俺の背に乗れ！　ここから脱出する」

ザインの申し出を断る理由は、今のケイトには無い。

ケイトとカイルは、灰色の狼の背に跨った。

ケイトのもう一人の子、スカロンは、バスケットの中で寝息を立てている。

ケイトは、それをしっかりと抱えた。

「行くぞ！」

ザインは、一飛びで屋根に翔び付き、その上を走り始めた。

巨大な狼の脚力で、足の下のスレートが、薄氷のようにパリパリ割れた。

地上を走るよりも、屋根の上に行く方が安全だった。

ザインは、驚異的な跳躍力で次々と屋根を飛び移り、村からの脱出を計っていた。

ヒュン、ヒュン、ヒュン、ヒュン

嫌な風切り音が、ザインの聴覚を刺激した。

耳障りなその音は、矢の飛来音だ。

「ケイト、気を付けろ！　教会の屋根に弓兵がいる！」

教会は、村で一番の高い建物だ。その教会を見上げると、鐘楼の中に数名の弓兵がいた。

彼らは、路上を逃げ惑う人々を射殺すためにここに来ていた。ザイン達を発見したのは、偶然によるものだ。

ザインは、彼らに構わず先を急いだ。今の移動速度なら、矢が当たる心配は無い。

ところが、とある一軒の屋根に飛び移った時、左の後ろ足が屋根のスレートを突き破った。

狼の大きな体が、左に傾く。

その時、三本の矢が、ザイン達に向かって飛んで来た。

ザインは、尻尾を振って矢を弾く。

しかし、二本までだった。

残りの一本は、ケイトが抱えるバスケットに照準が合っている。

もちろん、バスケットの中には赤ん坊のスカロンがいた。

ケイトは、両手でバスケットを抱えているため、素早い対応ができない状態だった。

「あーっ！」

慌ててバスケットをかばうケイト。

スカロンに矢が刺さるよりも、自分に刺さる方を選んだのだ。

しかし、矢はバスケットにも、ケイトにも刺さらなかった。

ぷっくりとした小さな手が、その矢を止めていた。

しっかりと矢を握っているその手は、カイルの物だった。

カイルは、無邪気な瞳でケイトを見上げていた。

「良くやったわ。弟と母さんを守ってくれたのね！」

ケイトに褒められて、カイルは素直に喜んだ。大きな瞳が得意気に輝き、ニコリとした。

その照れたような笑顔に、ケイトの心は癒された。

危機を回避してホッとしているケイトに、ザインは声を掛けた。

「ひとつお返ししてやるか！」

ケイトは、カイルから矢を受け取ると、空中に放った。

ザインは、それを尻尾のフルスイングで元の持ち主の方に打ち返した。

矢は、物凄い勢いで飛んで行った。そして、教会の鐘に突き当たる。

グワーン、グワーン

三人の弓兵は、耳元で起きた突然の鐘の音に驚いた。

そして、鐘楼から足を踏み外して転落した。

ザインは、三つの影が落下していくのを確認して満足した。

こうして、彼らは無事に村を脱出したのだった。

一方その頃、村の惨事は終焉を迎えていた。

燃え盛る炎が、その広場を明々と照らしていた。広場には、村人の死体が集められていた。しかも、胴体と首は別々になっている。

まるでゴミでも扱うように、次々と山積みになれていく遺体。

その人物が現れたのは、そんな時だった。

「閣下、ヴァンパイアどもはほぼ壊滅です」

一人の兵士が、緊張した面持ちでその人物に話しかけた。

閣下と呼ばれたその男は、マイア王国の参謀官だった。名前をベルクと言う。

彼は、まだ三十歳を二つ三つでたばかりだと言うのに、やけに老獪な雰囲気をもし出していた。鷲鼻で眼光鋭く、その前に立つだけで背筋が伸びてしまう。そんなタイプの男だった。

「これで化け物どもの片はついたな」

ベルクは、満足気に笑みを浮かべていた。

彼の着ている紅い外套とベレー帽が、血の色を思わせた。

ウォー、ウォオオオオー、

その時、広場全体に狼の遠吠えが響き渡った。

「何だ？ あれは」

ベルクの問いに、兵士が答えた。

「実は、狼に変身した奴がしまして、そいつに逃げられてしまいました」

兵士の答えに、ベルクは意外そうな顔をした。

「満月でなくても変身できるのか？」

ウォー、ウォオオオオオ

遠吠えは、しつこいくらいに響いて来た。

まるで、殺戮者たちを脅かすかのように……。

いや、それよりも、生き残っているかも知れない仲間に出自分の無事を知らせているのかも知れない。

ベルクは、哀し気に響く狼の遠吠えに冷笑を浮かべた。

「よく吠える負け犬だ。生きている仲間はここにはおらんと言うのに」

このベルク参謀官の指摘は正しく無かった。

実は、二人の幼い兄と妹が、死体の山の中に生きていた。大人の服の中に二人で隠れて、首無し死体を演じていた。

そして、ベルクの様子をそつと窺っていた。
燃えるような赤い目で……。

村での惨劇の後、ザインは仲間を探すために旅立った。

ザインと別れたケイトは、カイルをとある村の司祭に預けた。

二人の子供を連れての逃亡生活は、無理だと判断したのだ。

そうになると、やはり乳飲み児は手放せない。
スカロン

カイルと悲しい別れをしたケイトは、スカロンと共にマイア王国の首都、マイアール市内に潜り込んだ。

地方よりも、色々な人が集まる都市部の方が身を隠しやすいからだ。

ケイトは、フレグラント家で下働きを始めた。

そこで、フレグラント家の当主、フレグラント公爵の目に止まり、
彼に求婚された。

公爵家に嫁いだケイトは、モンテスパン・デュ・フレグラント公爵
夫人に名を改めた。

それから、月日が流れ、あの事件が起きたのだ。エルシークやコー
ディー、クリスにタックス、そして、カイルが巻き込まれたあの事
件が……。了

後編（後書き）

作品のご愛読ありがとうございます。オリオンの著書「マイアール
皇国記 魔人復活編（文芸社 税込み1050円）」は、全国の書
店から取り寄せる事ができます。こちらもお願ひします♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3161b/>

ヴァンパイアの血族 -マイアール皇国記外伝-

2010年10月11日19時36分発行